

I-1 教育研究員報告

教育研究員報告 ー外国語活動研究班ー

自然につながるスモールトーク

ーつい英語で話したくなる子供を目指してー

姫路市立総合教育センター

外国語活動研究班

姫路市立系引小学校 教諭 國師 暁代

姫路市立高岡小学校 教諭 大西 佑果

姫路市立荒川小学校 教諭 今岡 聡子

姫路市立白鷺小中学校 教諭 岡本 直子

<キーワード>

知識の見える化 真正な対話 中間フィードバック 完璧は求めない 実践のループで慣れる

<要約>

スモールトークの実践を行うことは、真のコミュニケーション力の育成につながる。そこで、スモールトークの成功につなげるための方法として、英語の木や振り返りシートを使った知識の見える化、朝の会等を通じた機会の提供、などの取組を行った。

また授業では、中間フィードバックを大切にした。語彙の知識をシェアしたり、レスポンス表現を練習させたり、既習表現を活かす方法を考えさせたり、得た知識を使いこなしたりする方法を学ばせた。

「英語でやり取りする」ことを楽しむ児童の姿を目指して研究に取り組み、成果を得ることができた。

1 研究のねらい

小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック(2017)によると、スモールトークとは、ライブで子供が本当のことを聞いたり、言ったりする活動である。第5学年では、教師が語るスモールトークについて児童が聞くことが主な活動とされており、第6学年では、児童同士で自分のことについてやり取りすることが求められる。

その時間に学習した表現を扱い、お互いにやり取りすることにとどまらず、スモールトークでは、既習語句や表現を繰り返し活用し、自分の考えや気持ちを伝え合わせ、できるだけ対話を続けさせることがねらいとされる。それはつまり対話の練習ではなく、真正な対話である。自分の考えや気持ちをどの既習語句や表現を使って言い表せばよいかを考えて選択し、表現することで、伝わったときの喜びを感じることができる。また、友達が使う既習語句や表現を聞くことで、その使い方についての理解が深まることが期待できる。

つまりスモールトークによって得られる学びとは、「主体的な学び」すなわち子供自身が興味を持って積極的に取り組むとともに学習活動を自ら振り返ることで意味付けたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりできる学びである。と同時に、「対話的な学び」すなわち多様な表現を通じて、教職員と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていく学びであるとも言える。そして「深い学び」すなわち習得・活用・探究という学びの過程の中で、教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解する学びでもあると言えるだろう。

スモールトークを通して、自分の中にある知識を実際に活用する能力の育成ができる。さらに伝え合うことができたという成功体験がさらにまた英語を使って伝え合いたいと思わせる学びの連続性につながることも期待できる。

脳科学的な見地からもスモールトークの有用性は述べることができる。植村(2009)によると、脳の神経細胞(脳細胞)は使えば使うほどその機能に合致した新しい神経回路網を形成する。しかし、長期間に亘って全く使用しない神経回路網はやがて喪失する。

それが忘却である。つまり、学習した表現や語句を繰り返し使うことが学習の強化につながり、逆に言うと使わなければ忘れてしまうということである。スモールトークにおいて既習語句や表現を繰り返し使うことで、知識が強化されるということだ。

村野井(2006)は、第二言語習得に向かう情報のインプットにおいて①理解可能(現在のレベルよりほんのちょっと上のレベル)であること、②興味を持っている内容(relevant)であること、③真正性(authenticity)のある本物(現実のコミュニケーションで使用される言語)であること、④音声と文字両方のモードで取り入れること、の4つの点が必要であるとしている。このうち①から③がスモールトークの場面では自ずと設定可能である。

2020年度からは、第5学年、第6学年で年間70時間の外国語科の学習が始まった。スモールトークはおよそ2回に1回の割合で実施することが理想とされている。つまり年間35回であり、たいへん多くの時間がスモールトークに充てられていると言えるだろう。

しかし、スモールトークの成功につながるための手立ての情報は乏しい。

したがってスモールトークの成功につながる工夫について研究することが重要であると考え、本研究テーマを設定した。

2 研究の内容

(1) 実態把握調査

① 児童へのアンケート調査

研究員の教室においては、授業の中で取り扱う場面設定における表現を児童は身につけつつある。しかし、以下に示す2019年10月実態調査から、その日に習った表現を離れて、自分のことを英語で話し合うことができる力については、まだ十分でないということがわかった。

(ア) 方法

第6学年 対象児童 33名 実施時期 2019年10月

教師によるスモールトーク(自己紹介)を1分間聞かせた後、児童同士に自己紹介をテーマとしたスモールトークを1分間行うように指示した。その際、児童自身に何往復のやり取りが成立したかを数えさせた。また、スモールトークの後、思ったこと、難しかったことと、使った既習表現は何であったかについて、アンケート調査を行った。

(イ) 結果

1分間におけるやり取りの回数は平均3.6往復であり、期待する8往復程度(自然な会話のスピード)には至っていなかった。

やり取りが続かなかった理由としては、以下のようなものが挙げられた。

- 英語は目で見て、ジェスチャーから想像できることが分かった。でも英語が分かっても次にどう相手に返したらいいか分からなかった。
- 質問されていることは分かっても、どう答えていいか英単語が分からなかった。そもそも知らない表現が多い。
- 習った表現だけでは、会話が続かない。もっと会話が続くような言葉を知りたい。

自己紹介の際、既習表現の中でよく使えていた表現はあったが、使える表現に偏りがあり、会話が続かない、深まらないという様子が見られた。

(表1 10月 参照)

② 日々の生活の見取りから

研究員の教室での児童(3年生、5年生、6年生)の様子からは、英語を難しいと拒否する児童は少なく、楽しみながら取り組もうとしている姿が見られる。例えば「好

きな色はなんですか」という表現を習えば、授業中に積極的にその表現を使って、やり取りする姿が見られる。

しかし、そんな子供たちでも、ALT や外国語指導補助員の先生に対して進んで話しかけようとする態度を見せる子は少ない。また、話しかけに行った子がいたとしても、自分の質問に相手が答えてくれたあと、切り返すことができずに固まってしまうことがある。

①、②から見てきたことは、決まった答えに対しての決まった反応はできるが、既習事項から言いたいことを選ぶことが難しいということである。また、自然なやり取りをつなぐ、レスポンス表現が必要だということがわかった。

以上のことから、既習事項から言いたいことに合う表現を見つけ出す力、相手の答えに反応して切り返して質問する力、相手の話したことにレスポンスする力を身につける必要が大いにあると考えた。また、単語が分からず会話が止まってしまう児童も多いことから、語彙力をつけることも必要だということが分かった。

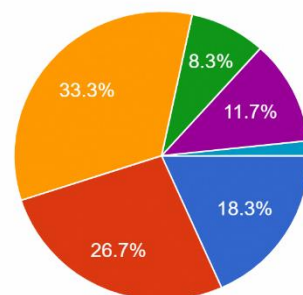
③ 教師へのアンケート調査

スモールトークの実施状況等を調査するために、市内の小学校にアンケートを行った。

(2020 年 11 月)

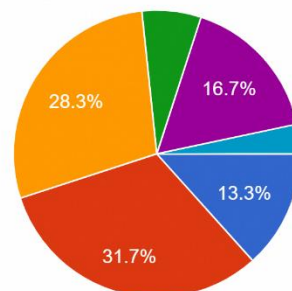
5年生のスモールトークの実施状況を教えてください。5年生のスモールトークとは、教師が1分程度、英語で話したものを児童が聞き、何が聞こえたかを言ったり、教師からの質問に答えたりする活動を指します。複数クラスある場合は、平均の数値を教えてください。

平均して3,4時間に一回程度実施している。(33.3%)
平均して2時間に一回程度実施している。(26.7%)
平均して毎回実施している。(18.3%)
実施したことはある。(11.7%)
平均して5,6時間に一回程度実施している。(8.3%)
これから実施する。(1.7%)



6年生のスマールトークの実施状況を教えてください。6年生のスマールトークとは、(教師が1分程度、英語を話したあと)児童がテーマにそって自分自身のことを英語でやり取りする活動を指します。複数クラスある場合は、平均の数値を教えてください。

平均して2時間に一回程度実施している。(31.7%)
平均して3,4時間に一回程度実施している。(28.3%)
実施したことはある。(16.7%)
平均して毎回実施している。(13.3%)
平均して5,6時間に一回程度実施している。(6.7%)
これから実施する。(3.3%)



アンケートの結果から、多くの教師がスマールトークに取り組もうとしていたり、困り感を抱えながらスマールトークに取り組んでいたたりする実態が浮かび上がってきた。教師の悩みは大きく分けて3つあることが確認できた。

- 時間のとり方について
- 対話のための語彙の力を伸ばす手立てについて
- スマールトークのテーマ設定について

(2) 他市研究会・研修への参加

① 上甲子園小学校

令和元年 8 月に西宮市立上甲子園小学校で開催された「兵庫県小学校教育研究会外国語部夏季研修会」に参加した。本研修では、関西大学外国語学部今井裕之教授による「2020 小学校外国語教育の課題～評価、文字指導、教材活用～」をテーマとした講演が行われた。そこで挙げられた評価ポイントの中で、中間フィードバックやリトライをキーワードにして、やりっぱなしを回避し、さらに振り返りで終えず、再度やり直し、できた・よりうまくできた実感を持ち、何を学んだかを意識化できる授業展開をしていくことが大切であることを学んだ。中間フィードバックという考え方は、スマールトークにおいて、1 回目のスマールトークで言えなかった表現、言いたかった表現について、児童に振り返らせ、それを教室全体で考察し、2 回目のスマールト

ークに生かしていくというような展開で行うことができると考えられる。その後の演習では、スモールトークのねらいや求められるレベル、使える語彙・表現について学んだ。

② 明石市立沢池小学校

令和元年 11 月に明石市立沢池小学校で開催された「第 1 回兵庫県小学校外国語・外国語活動研究発表会」に参加した。講演では、兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 吉田達弘教授による「新学習指導要領に向けた外国語のあり方～児童と教師の主体性を中心に～」というテーマで行われた。その中でスモールトークについては「型にはめすぎない」とことと、会話のめあては何なのかを明確にして取り組むことが大切であるということを学んだ。そしてスモールトークでは教師の即興性とアセスメント（形成的評価）の観点が必要で、特にアセスメントにおいては外国語の場合、中間フィードバックが有効であるということを学んだ。

(3) 実践

① スモールトークの実践（通常授業において開始の 10 分で実施）

初回には、スモールトークについてのオリエンテーションを行い、スモールトークの取り組みを継続することで、会話する力が身に付くことを理解させた。

授業の流れとしては、以下のように取り組んだ。

【スモールトークをさせるときの流れⅠ】

自然な会話への7ステップを目指そう！

(ア)にこにこ	Smile
(イ)うなずく	Aha. I see.
(ウ)繰り返し	Oh, (オウム返し)
(エ)褒める	Good. Great. Cool.
(オ)意思を示す	Me, too. Really?
(カ)詳しく聞く	Where When What Which
(キ)相手の意見に対して 自分の意見を言う	I think

以上の(ア)～(キ)を、自然な会話への7ステップとして、掲示した。「今日は、(ア)と(イ)は必ずスモールトークの中で使えるようにがんばってみよう。」などというように、段階的に目標を定めさせた。

【スモールトークをさせるときの流れⅡ】

- (ア)まず、教師が人形か ALT を相手として、スモールトークする様子を見せる(2分)
- (イ)聞こえてきた表現について確認させる(2分)
- (ウ)スモールトークを1回させる(1分)
- (エ)使えた表現を確認させる(1分)
- (オ)Discussion time で何に困り、どのような表現を使えば良かったかを全員で中間フィードバックさせる。(2分)
- (カ)相手を変えて、スモールトークの2回目をさせる(1分)
- (キ)2回分のスモールトークについて振り返りをさせる(1分)

Small Talk Theme【自己紹介をしよう。】

Small Talk で使えた表現にチェックしよう。

自分のことをいう	10月	3月
Hi! Hello!	26人	33人
My name is ~.	28人	33人
I like ~.	21人	31人
I don't like ~.	13人	25人
I can ~.	7人	20人
I can't ~.	5人	15人
I went ~.	2人	10人
I saw ~.	0人	15人
I enjoyed ~.	0人	14人
I ate ~.	0人	20人
It was ~.	1人	18人
My birthday is ~.	7人	17人
I want ~.	2人	18人
その他で使えた表現 I'm ~.	15人	25人

相手に質問する	10月	3月
How are you?	20人	33人
What do you like?	28人	33人
Can you ~?	5人	15人
When is your birthday?	4人	9人
What do you want ~?	0人	10人
What's this?	0人	10人
その他で使えた表現 How about you?	30人	33人

以上の実践を継続し、3月に再びアンケート調査を行った。その結果、6年生の1分間におけるやり取りの回数は10月が平均3.6往復であったことに対し、3月には、8.6往復まで増えたことが確認できた。

左記は、どのような語句が使えるようになったか示した表である。(表1)

(表1)

相手に反応する	10月	3月
Me too.	10人	30人
I don't know.	3人	5人
Really?	5人	20人
Good. Cool. Nice. Great.	4人	30人
That's a good idea.	0人	5人
That's right.	0人	5人
Pardon?	5人	23人
I see.	10人	15人
Why?	25人	30人
Good job.	2人	4人
Aha.	5人	28人
その他で使えた表現 Wow!	20人	25人
It's fantastic.	10人	20人
It's exciting.	15人	17人
It's fun.	8人	9人
It's beautiful.	2人	5人

また、やり取りを終えた(キ)の振り返りでは、以下のようなものが挙がった。

- 自信につながった。
- 自分のことを表現したいという思いを持てるようになった。
- 知っている表現から、言いたいことを考えるくせがついた。
- スモールトークで使える表現が増えた。
- 会話と会話をつなぐ表現を使えるようになった。
- 英語にも相手に合わせて、丁寧に伝える表現があることがわかった。

以上のように、スモールトークの経験を通して自分自身を語る実践を積み上げたことで、語彙(知識)、語彙の中から適切な表現を選ぶ力、会話を続ける力、のどれも大きくのびたことが伺える。

② 朝の会での英語スピーチ

朝のスピーチでは、既習表現を用いて、自分のことについて述べさせた。I like ～や I want～。といった内容は学年を問わず、児童にとっても関心の高い話題であった。

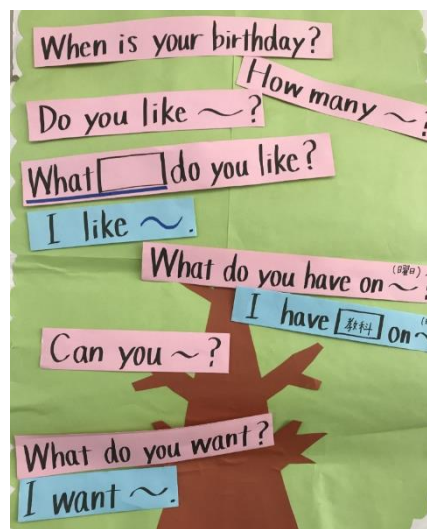
外国語の導入期である3年生でも、最初こそ表現の仕方を確認する児童が見られたが、同じ表現を繰り返し耳にすることで、自信を持ってスピーチをすることができていた。事前に英語で何というか確認に来たり自分で調べたりして、積極的に取り組むことができていた。3年生では最初の1文だけを英語で、そのあとは日本語でスピーチさせた。

5・6年生では、授業で日頃から既習表現を復習していることもあり、短い英文を伝えることは容易に取り組むことができていた。また、話を聞いた児童には、そのスピーチに対してリアクションをさせたが、これも負担なく容易に取り組むことができていた。

③ 英語の木

前出のスピーチでも役立ったのが、2019年度より教室内に掲示している「英語の木」であった。掲示物「英語の木」を模造紙で制作し、新しい表現を学習する度に表現を貼りつけ、児童が既習表現を確認したい時にいつでも見て確かめることができるようにした。表現を掲示する「表現の木」、単語を掲示する「単語の木」、リアクションを掲示する「リアクションの木」などいくつかに分類して作成した。

2020年度には、英語ファイル(ノート)の中に英語の木を作り、既習表現や調べた表現をそこに足していき、児童がいつでも確認できるようにした。そのデータをデジタル化して、授業の度に画面に映していつでも提示することで、ALTとのスモールトークの場面でも活用している姿が見られた。



④ 実態調査における教師の悩み解決に向けて

(ア) 時間が取れないことについて

最初は時間がかかると覚悟し、教師も児童も取り組むことが必要である。取り組み始めた当初は、会話が途切れるなどぎこちない雰囲気も予想されるが、慣れることで解消されると考える。2回に1回はスモールトークが行えるよう、年度当初から単元の計画を立てることで時間は作り出せると考える。

(イ) 語彙を増やす指導の仕方について

児童が授業で身につけてきた知識を積極的に見える化することで知識を自覚させ、ことあるごとに思い出せるように仕向ける必要がある。具体的な方法として英語の木と振り返りシートがある。英語の木では、尋ねる表現を集めたレスポンスの木、新出単語を集めた木などを作成し、常に掲示することで表現や単語を思い出しやすいことができる。掲示が難しい場合は、デジタル化して必要な時に画面に映し出すことも方法として考えられる。振り返りシートは、スモールトークを行った直後に自分の使えた表現をチェックさせるもので、継続的に使うことで児童が自分の伸びを実感することができる。研究班のメンバーの学級では、このような方法で知識を自覚させることで、使える言葉をどんどん増やす児童の様子が見られた。

(ウ) スモールトークのテーマ設定について

テーマは毎回既習の内容から選ぶことになる。その時学習している内容にすることが適当であるが、その単元の第1時にまだ習っていない表現を使わせるのは無理がある。そんな時には、季節や行事に合わせてテーマを選んでいくことも考えられる。単元で学んだ表現が使えるようになれば、後半で単元の表現を使って無理なくスモールトークを行うことができると考える。

3 成果と課題

成果としては、スモールトークの力を伸ばすためには、継続的で、真正性のある取り組みが有効であるということが分かった。表1からも分かるように、たくさんの機会を経て、児童が自然に英語でやり取りする力を身に着けていったことが分かる。

授業におけるスモールトークの時間をしっかりと確保することはもちろんであるが、朝の会での実践など、英語を身近に感じさせ、使う機会を増やす取り組みや、英語の木など、自分が身に着けた英語の力を児童自身が実感、目視できるような取組を継続

していくことが有効であるといえるだろう。

テーマである「自然につながるスモールトーク」のためには、レスポンスの言葉を獲得させることが重要であることも分かった。例えば「How about you?」のように、頻繁に会話に登場する表現について注目させて、獲得させていく必要がある。児童がレスポンス表現を多く身に着けたことで、会話が滞らず、連続性を持たせることが可能となった。

また、日本語を英語に訳するという感覚では自然なスピードで会話することは不可能であるため、シチュエーションに合わせて自然な英語が出てくるという感覚を身に着けさせる必要があり、そのためにも繰り返し機会を持たせる必要があることも分かった。

間違った英語を使ってもいいから、まずはアウトプットさせ、それを何度か繰り返すことで、知識を修正しつつ、自分のものにさせていく。そうやって実践のループを回すことで、徐々に語彙を増やさせ、対話に慣れさせることが大切である。「訳する」感覚でいるとぴったりの言葉を見つけようとしすぎて、英語が出てこないということになる。これは、理解はできていても内在化ができていない状態である。それを避けるためにも、自分の知っている言葉で言い換えたり、似たような言葉で補ったりという、「曖昧さを受容する」態度が必要であるといえるだろう。完璧な英語でのやり取りを目指すのではなく、自分の英語も相手の英語も曖昧さを受け入れながらアウトプットし合い、お互いに修正し合えばいいのである。

スモールトークのあと、中間フィードバックで、お互いに交流して、どのような表現を使えばよかったのか考察、評価し合うことも大切であった。それらは与えられた知識ではなく、自分たちで獲得した表現となり、より実践的な知識として児童に身につくからである。

課題としては、スモールトークの機会を生かして、どんどん使える表現を獲得した児童がいた半面、苦手意識が強く、自信をもてずにあまり力を伸ばせなかった児童もい

たことが浮かび上がった。

4 おわりに

今後3・4年生からの外国語活動の時間を生かして、一定程度の語彙力を持たせることや、英語を話すことに対しての抵抗感をなくしていくことが非常に重要であると考えられる。そのためには、英語絵本や英語の歌などに触れさせる機会をもつことも考えたい。スモールトークは5・6年生での実践であるが、その成功の鍵は基礎的な力を3・4年生で養うことだと言えるだろう。

英語に触れる機会とともに実際に使う機会を数多く設定し、教師も児童も楽しくスムーズに、思わず英語が口をついて出る、そんな教室を目指して、今後も挑戦を続けていきたい。

5 参考文献

(1)中央教育審議会答申(平成28年12月)

(2)植村研一『脳科学から見た効果的多言語習得のコツ』 2009年

(3)村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』

大修館書店 2006年

(4)山口美穂『身近な話題で楽しく話せる!Small Talk 月別メニュー88』

明治図書出版 2019年